

---

# ジャラーの悪戯

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ジャラーの悪戯

### 【Nコード】

N1881F

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

大昔のインドのお話。子供ができないことに困った王様は女神ジャラーに御願いするのですがこの女神様が困った方で。インドを舞台にした童話です。

## 第一章

### ジャラーの悪戯

昔々のインドのお話です。インドにはジャラーという女神がいました。

ジャラーはとても大きな女神で起きるとそれこそどんな木よりも大きいのでした。けれど優しい女神様で皆からとても信仰されました。けれどこのジャラーには一つだけ困ったことがあります。それは悪戯が大好きだったのです。少し時間があると人間のところにやって来て子供を木の上にあげたりミルクを全部飲んでしまったりお婆さんを大きな声で驚かしたり。そんなことが大好きだったのです。

けれどその後で絶対に大きなお詫びをしてくれるので人々からは慕われていました。ジャラーの絵を飾っていれば色々ないいことがあるので多くの人がジャラーの絵を家に飾っていました。

インドのある国の王様ブリハドラタもそんな人の一人でした。彼は毎日ジャラーの絵に対して参拝をしていました。そのおかげか国はとてもよく纏まり王様も皆から慕われていました。けれど王様は一つだけ困ったことがあったのです。

「まだできんのか」

「はい」

「申し訳ありません」

王様には二人の御后様がいました。御后様達は申し訳なさそうに王様に対して言うのでした。

「まだ。できません」

「私もです」

「わしは何でも持っておる」

国は豊かで王様は皆から慕われています。まずは満足していたのです。

「しかしじゃ。一つだけ持っていないものがあるのじゃ」  
困った顔で御后様達に言うのでした。

「子供じゃ。できんか」

「あらゆる御薬を飲んだりしていますけれど」

「それでもです」

「やっぱり御后様達の返事は変わらないのでした。」

「申し訳ありませんが」

「まだ」

「やれやれ、まだできんのか」

王様は子供がどうしても欲しかったのです。けれど二人の御后様はどちらも子供ができる気配一つありません。それでどうしたものかと困っていたのです。そんな王様のところにある日。ジャラーがやって来ました。

「王様、王様」

「むっ、何じゃ」

庭で果物を食べている王様のところにジャラーがその大きな身体でやって来ました。宮殿の庭にやって来た彼女は庭に立つ大木のようでした。

「ジャラー様か」

「そうだよ、困っているそうだね」

「楽しそうに笑って王様に尋ねるジャラーでした。」

「子供ができないって聞いたけれど」

「その通りなのです」

「王様はジャラーに言われて困り果てた顔で答えるのでした。」

「子供ができません。どうしたものか」

「王様はいつも私の絵に参拝しているよね」

「その困り果てた顔になった王様に対してまた尋ねてきました。」

「毎日。そうだよね」

「御存知でしたか」

「だって。王様の悩みだって知ってるんだよ」

ジャラーはにこにことして答えます。

「それだったら知らない筈ないじゃない。そうでしょ?」

「そういえばそうじゃな」

言われてみればその通りです。何しろジャラーは神様なのです。神様ならこんなことは知っていて当然だと王様もわかったのです。

「それでは。わしのこの悩みですが」

「そのマンゴーだけねど」

ジャラーはここで王様が今食べようと皿の上に置いていた一つのマンゴーを指差しました。

「それを御后様に食べさせるといいよ」

「これをですか」

「そうだよ。それだけでいいんだよ」

にこにことしたその笑顔で王様に言います。

「それを御后様達に食べさせてあげるんだ」

「このマンゴーをですね」

「まずは二つに割って」

食べ方まで教えてくれます。

「それを半分ずつ食べさせるんだ。それでいいんだよ」

「それだけですか」

「そう、それだけ」

にっこりとした笑顔での言葉でした。

「それだけでいいから。簡単でしょ」

「そうですね。確かに」

「わかったら早速やってみて」

今度は王様に対して急かすのでした。

「そうしたら王様には子供ができるからね」

「わかりました。では早速」

「ただし」

ここでジャラーは念を押してきました。

## 第二章

「絶対に二つに割るんだよ」

「絶対にですか」

「それでそのそれぞれ一つを食べさせるんだよ」

御后様それそれにと言うのでした。

「それだけは守って。いいね」

「わかりました。それでは割った一つを一つずつ」

「うん」

王様の言葉に頷いてみせます。

「それだけ。王様には立派な子供が授かるからね」

「有り難き御言葉。では早速」

「その子供、きつと立派な子供だから」

ジャラーは楽しそうに王様に話し続けます。

「楽しみにしておいてね。絶対だよ」

「はい、わかりました」

ジャラーはここまで王様に伝えると煙の様に姿を消してしまいました。後には何も残っていませんでした。やっぱり神様だけはありません。

こうしてジャラーから話を聞いた王様はすぐにそのマンゴーを二つに割ってその一つずつを御后様達に与えました。御后様達は喜んでそのマンゴーを美味しくしようと食べました。すると程なくして。

御后様達はお腹が大きくなりました。しかも二人共です。王様はそれを見て満面に笑みを浮かべてこう言いました。

「これこそジャラー様の御加護じゃな」

「はい、その通りです」

「全くです」

御后様達も大喜びです。何しろやっと子供ができたのですから。嬉しくない筈がありませんでした。

「しかも二人共です」

「何と素晴らしいことなのでしょう」

「いやいや、これだけではないそうじゃ」

王様は二人の御后様にさらに言います。

「何でもな。生まれて来る子はな」

「生まれて来る子は」

「非常に立派な子供であるらしいぞ」

ジャラーが言ったことをそのまま二人に伝えるのでした。

「それはそれは素晴らしい子供だそうじゃ」

「そんなにですか」

「そう、そんなにじゃ」

その満面の笑顔で二人に答えます。

「だから。楽しみにしておくようにな」

「わかりました」

「では子供が産まれた時には」

「うむ」

笑顔はそのまま続くのでした。その笑顔でまた。

「思う存分祝福しようぞ。いいな」

「はい、御願いします」

「その時は」

「その時はもうすぐだのう」

このことも思い笑う王様でした。王様の上機嫌は何処までも続くと思われました。そうして子供ができてからと十月が経ち産まれると。何と恐ろしいことに。

「な、何イ!!」

王様は産まれた子供を見て腰が抜けんばかりに驚くのでした。

「何じゃこれは、どういったことじゃ!」

「わ、私共に言われましても」

「何が何なのか」

御后様達も驚くばかりです。何と産まれた子供は。そう、子供達

ではなかったのです。

産まれたのは一人でした。二人の御后様から一人の子供が産まれたのです。どういうことかといいますと子供は確かに産まれました。けれど産まれたのはそれぞれ子供を縦に二つに割った子供で。二人の御后様がそれぞれその半分を産んだのです。

「王様、これは一体」

「何の呪いでしょうか」

「わしもわからぬ」

何とその半分ずつの子供はそのまま泣いています。生きているのは確かなのですがそれでも半分ずつです。とても異様な光景です。

### 第三章

「生きておるし。これは何事なのじゃ」

「驚いた？」

ところが。ここで不意に女の声が聞こえてきたのでした。

「おや？」

「あの声は」

「うむ、間違いない」

御后様達も王様の今の言葉でわかりました。それが誰の声なのか。

「王様、いる？いたら返事してくれない？」

「ここにいますぞ」

「ああ、そこなんだ」

また声が返つてきました。それはやっぱりジャラーの声でした。

早速部屋の中にそのジャラーがやって来ます。あまりにも大きくて宮殿の天井を取り外してそこから入って来たのでした。最初からもうかなり迷惑な部屋の入り方でした。

「やあやあ、こんにちは」

「こんにちわですか」

「最初はまず挨拶をしないとね」

何故か変なところで礼儀正しいジャラーでした。

「だからこんにちは」

「御機嫌麗しいようで何よりです」

「堅苦しいねえ」

ジャラーは王様の今の挨拶に少し口を尖らせてきました。

「別にそんなふうにしなくていいんだよ、あたしにはね」

「そうなのですか」

「あたしは堅苦しいことは嫌いなんだよ」

また笑って話すのでした。

「だからさ。こんにちはでいいんだよ」

「はあ」

「この話はこれでね」

話し終わるともう別の話に移るのでした。

「さてと、困ってるみたいだね」

「おわかりなですか」

「だから。あたしは神様だよ」

王様と御后様達の前に聳え立つように立って話をしてきました。

「わからない訳ないじゃないか」

「それでおわかりなんですか」

「丁度今ここにその困ってる話があるしね」

ちらりと半分半分になっている子供を見ます。

「おやおや、これは」

「これなのですよ」

王様はその半分に分かれて泣いている子供を見てジャラーに話すのでした。

「どういうわけか。何で半分に分かれたのか」

「そうです」

「どうしてこんな」

御后様達も困り果てた顔になっています。その困り果てた顔でそれぞれ子供を抱えています。その半分ずつをしっかりと。

「あたしがやったからね」

「えっ!？」

「ジャラー様が!？」

王様も御后様達も今のジャラーの言葉に啞然とします。

「それはどういうことですか!？」

「やったとは」

「だから。マンゴーを半分ずつなんだよ」

ジャラーは笑いながら王様達に話すのでした。

「半分ずつ食べたからね。だから」

「子供達が半分ずつなんですか」

「それでなんですか」

「そういうことだよ。驚いたかい？」

「驚くも何も」

王様達は驚くことしきりでした。とりあえずどうして子供が半分ずつになったのかわかったのです。ところが問題はまだ残っていました。

「それはわかりましたが」

「そうです」

「子供はどうしたら」

三人揃って口を開いてきました。半分半分なのはおかしいのは言うまでもないです。問題は子供がどうやったら元に戻るかです。三人はそれをジャラーに問うたのです。

「そんなのは簡単だよ」

にこりと笑って答えるジャラーでした。

「子供を普通にしたいんだね」

「そうですよ」

「それはどうしたら」

「貸してみな」

あっけらかんとした笑顔で少し怒った顔になっている御后様達に答えるのでした。

「子供をね。すぐに終わるから」

「すぐにですか」

「あたしは悪戯はするけれど嘘はつかないよ」

こうしたところでは正直なジャラーでした。

「絶対にね」

「それじゃあ」

「今度も」

「だから。貸してみな」

ここであらためて子供を渡すように二人に言うのでした。

「本当にすぐだからね」

「はあ」

「そうでしたら」

御后様達も今はジャラーの言葉を聞くしかありませんでした。とにかくこの半分半分になってしまった子供をなおせるといふのはジャラーしかいないのですから。正直今は藁にもすがらような気持ちだったのです。元々ジャラーのせいなのですから考えてみればおかしいのですが。

## 第四章

「御願います」

「どうか」

「はいよっ」

受け取ってすぐでした。その半分半分を切り目で合わせるともう、それで子供は下に戻ったのでした。本当にあつと言つ間のことでした。

「どうだい、これで」

「本当にすぐでしたね」

「だから言ってるじゃないか」

おかしそうに笑つて王様に答えます。

「あたしは嘘はつかないつてね」

「確かにそうですね」

「あとこの子供だけねどね」

そのくつついた子供の話に移りました。

「あたしがこうやってくつつけたんだ。淒い子になるよ」

「淒い子ですか」

「そうだよ。絶対にね」

これは保障するのでした。女神様であるジャラーが。それだけに今の言葉はかなり説得力のあるものでもありました。

「淒い王様になるだらうね」

「そんなにですか」

「そうだよ、安心していいよ」

太鼓判さえ押してみせます。

「女神様の言葉だからね」

そしてさらに。言葉が続けるのでした。

「それと。後は」

「後は？」

「名前つけてないだろ」

ふとかなり初歩的なことを話してきました。

「もしかしなくても」

「あつ、そういえば」

「ついつい子供に夢中で」

「それで」

王様も御后様達もそのことに気付くのです。ふと立ち止まってみるとその通りだったのです。これは迂闊と言えば迂闊なことでした。

「やれやれ。困った親御さん達だねえ」

「元はといえばジャラー様のせいではないんですか？」

「まあそれはいいとしてだよ」

さりげなくそれは誤魔化すジャラーでした。

「名前だよね。考えてないだろ」

「お蔭様で」

今の王様の言葉には少しだけ嫌味が入っていました。といっても嫌味の一つや二つでいちいちへこたれたり気にしたりするジャラーではないですけれど。

「じゃああたしが付けてあげるよ」

「ジャラー様がですか」

「神様が名付けてあげるんだよ。いいだろ」

「まあそれは」

それにはまあいいとする王様なのでした。

「宜しければ御願います。どうにも名前が思いつかなくて」

「そうかい。じゃあ丁度いいね」

「それで一体どんな名前に？」

「あたしがくつつけたからね」

楽しそうな笑みはそのままの言葉でした。

「そうだね。ここはジャラーサンダでどうだい？」

「ジャラーサンダですか」

「これならいいだろ」

ジャラーが結び付けてできた者という意味です。彼女のおかげで生まれて尚且つ分かれていたのが一つになったのですから。これは道理のある名付け方でした。

「どうだい？」

「じゃあまあそれで」

王様はそれでいいとしたのでした。

「御願います」

「あんた達はどうだい？」

ジャラーは今度は御后様達に尋ねました。

「それで。いいかい？」

「そうですね。私達も」

「別に」

御后様達も文句はないのでした。何しろ神様に名付けてもらうということは大変な名誉ですから。しかもその名前が中々よかったので余計にでした。

「いいんだね」

「はい、それで」

「是非共」

「さてさて、これで一件落着だね」

ジャラーはからからと大きな口を開けて笑って言いました。

「無事これで。よかったよかった」

「終わり良ければというやつですね」

「そうだよ、悪戯はそれの為のほんのスパイス」

「どうやらジャラーの悪戯はそういう意味があったようです。」

「最高のスパイスじゃないかい？」

最後まで大笑いしたままのジャラーでした。後にこの子供は偉大な王様になりました。その王様が生まれる時にはこんな騒ぎと悪戯があったのでした。

ジャラーの悪戯

完

2008・8・21

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1881f/>

---

ジャラーの悪戯

2010年10月8日15時04分発行